

ブックレビュー



『沖縄について私たちが知っておきたいこと』

高橋哲哉 著

筑摩書房 刊

定価 880円 (本体 800円＋税)

1956年生まれの哲学者が読み解く「本土と沖縄の関係」入門書だ。「日本の人口の九九% (有権者数でもほぼ同じ) を占める本土の人びとの政治的意思で選択され、その八割を超える圧倒的多数で支持され、今後も維持されていくだろう安保体制のもとで、人口・面積ともわずか1%程度の小さな沖縄に、全体の七割を超える米軍基地 (米軍専用施設) が置かれているという矛盾」について掘り下げる必読の書だ。読みやすく、しかし実証的で説得力がある。

なぜ沖縄はそうした被差別的な立場を強いられてきたのか。本書は全3章からなり、末尾に「対話 沖縄へのコロニアリズムについて (知念ウシ×高橋哲哉)」を添えている。「コロニアリズム」とは「植民地主義」のことだ。知念は1966年生まれの琉球人で、地元大学の非常勤講師を務める。著書に『シランフナー (知

らんふり) の暴力: 知念ウシ政治発言集』などがある。

第1章の「沖縄の歴史」では、「琉球処分・人類館事件・アジア太平洋戦争と沖縄」について触れ、沖縄が常に本土に蹂躪され、本土に都合のよい「捨て石」にされてきた歴史を検証する。第2章では「構造的差別とは何か」を問い、「沖縄戦後に『戦後』は来たか」「基地の島・沖縄」の苦渋に満ちたアジア太平洋戦争後の歩みに光を当てる。そして第3章では「沖縄からの『県外移設』論」や「新たな『沖縄戦』の危機」に言及し、「沖縄から問われる『構造的差別』」の由来が本土の日本人 (ヤマトウンチュ) の「無意識の植民地主義」にあることを暴きだす。

沖縄をめぐるこの国の戦後政治過程は、強権的できわめて欺瞞に満ちている。それを見て見ぬふりをし続ける本土の人びとの「自分ファースト」を問う穏やかな語り口が鋭い。

さんかいの げん
(山海野 玄)